

## 「哲学」の概念工学とはどのようなことか

笠木 雅史

### 1. はじめに

「メタ哲学」と呼ばれる哲学の分野が取り組む問題は多岐にわたるが、「哲学とは何を行うのか」という哲学の営みについての記述的な問題と、「哲学にはどのような意義があるのか」というその営みについての価値的な問題が含まれることに異論は少ないだろう。本稿は、これらの記述的な問題と価値的な問題に一定の回答を与えることを目的とする。ただし、本稿が与える回答は、哲学の営みのうち比較的新しい部分のみを扱うという点でも、その回答を導出する道筋が直線的ではないという点でも、単純なものとは言い難い。そこで最初に、本稿が提示する回答までの議論の道筋を図式的に示しておきたい。

- (1) 哲学界で現在国際的に行われている哲学の多様性・包摂性促進のための試みは、「哲学」とその関連語の概念工学の試みとみなすことができる。
- (2) 概念工学は一般に実行可能性が極めて低いが、「哲学」とその関連語の概念工学は実行可能性が高い。
- (3) 哲学の多様性・包摂性促進を通じた「哲学」とその関連語の概念工学は、哲学に関する認識的不正義の是正という意義以外に、新しい知的探求の主題、方法、そのための制度を哲学内に生み出すという意義を持つ。

本稿は、現在の哲学の営みには、「哲学」とその関連語についての概念工学が含まれるとし、その意義のみを論じる。この議論を提示するために、本稿は以下のように構成される。まず、第2節では、ハーマン・カペラン(Herman Cappelen)の考えに即して、概念工学について説明する。カペランの考えでは、概念工学の具体的内実は、メタ意味論、そして意味論としてどのような理論が採用され

るのかに依存する。本稿は、メタ意味論については立場を中立にするが、「哲学」とその関連語については、相互に独立の記述的要素と規範的要素を内包として持つ、二重性格概念(dual character concepts)を表す語であるという立場を採用する。そのため、第3節では二重性格概念について解説する。第4節では、「哲学」とその関連語が二重性格概念を表す語である例証として、哲学史の中から「哲学」とその関連語を用いた発話を幾つか紹介する。最後に第5節では、上記の議論を提示しつつ、「哲学」とその関連語についての概念工学（の一形態）がどのようなものになるのかを説明する。

## 2. 概念工学

現在のメタ哲学において「概念工学」と呼ばれている活動の内実は多様であり、それらすべてを包括する定義は、一般的・抽象的なものにならざるをえない。カペランによる一般的定義では、概念工学とは、「我々の表象手段を評価し、改良する試み」(Cappelen 2018 p. 3)である<sup>1</sup>。カペランの整理によれば、概念工学の内実が多様なものとなるのは、「どのような表象手段を対象とするか」、「どのようにその表象手段の適切性を評価するのか」、「不適切と評価された場合、どのようにその表象手段を改良するのか」、「その表象手段の評価と改良は、どのような意義を持っているのか」などの点について、さまざまな回答が可能だからである。しかし、さまざまな回答が可能だとしても、それらが等しく正しいということにはならない。概念工学についての議論は、どのような回答が正しいのかについての議論も含むものとなる。

我々が現に用いている表象手段にはさまざまなものがある。例えば、絵画や写真も表象であり、プラモデルや科学的モデルも表象である。したがって、これらの表象手段を対象とする概念工学も可能である。しかし、概念工学の実践とされる試みの筆頭として挙げられるのは、言語という表象手段を対象とするものである。このため、概念工学についての議論は、特定の語の表象手段である意味や内包をどのように評価し、どのように改良するのかという問題に取り組む。そして、言語の改良を論じるためには、意味や内包がどのようなものなのかという論点に加え、それらがどのような要因によって決定されるのかとい

う論点も論じなければならない。後者の論点が特に重要なのは、意味や内包を変化させるためには、その決定要因を調整しなければならないからである。このような理由で、概念工学についての議論は、意味論だけでなく、いわゆるメタ意味論についての議論を必然的に含まざるをえないと、カペランは指摘する。

本稿では、概念工学についてのさまざまな立場を網羅的に紹介し、検討することはできない。本稿の目的は、現在のメタ哲学における概念工学についての議論でもっとも体系的に展開されているカペランの概念工学についての考えを採用した上で、「哲学」とその関連語の概念工学について論じることである。カペランの考える概念工学は、特定の述語の内包や外延（あるいは、特定の名前の意味や指示）が不適切だという評価を行い、その内包や外延（あるいは、意味や指示）をより適切なものに変更するという試みである。注意しなければならないのは、述語の外延は、偶然的な要因によって常に変化しようという点である。例えば、「人である」という述語の外延は、個々の人々の生死によって、今この瞬間にも変化している。このような単に偶然的な外延の変化が、「概念工学」と呼ばれるわけではない。カペランの考える概念工学は、述語の内包（あるいは、名前の意味）を変更することにより、その外延を変更するという試みである。

カペランの整理では、ある述語の内包や外延が不適切であるという評価には、大別して4種類の異なる評価がありうる(ibid. p. 34)。まず、(i)特定の述語の内包が不整合であったり、矛盾を含んでいたり、曖昧であるといった意味論的欠陥を持っているという評価である。意味論的欠陥の指摘は述語の意味論的特徴そのものについての評価であるが、述語を使用することにより何らかの問題のある帰結が生じるという語用論的な評価が行われることもある。語用論的な評価に関しては、どのような意味で問題のある帰結が生じると指摘するのかに応じて、(ii)道徳的、政治的、あるいは社会的に問題のある帰結が生じるという評価、(iii)使用者の認知プロセスを阻害するという評価、(iv)外延についての適切な理論形成を困難にする、という3種類の評価がさらに区別される。

カペランは、言語行為が表現する命題について、「言語行為多元主義(speech act pluralism)」という立場を支持する。カペランはこの立場を用いることで、概念工学が変更するのは、単に内包と外延などの言語の意味論的特徴だけではな

く、現実である場合もあると強調する(ibid. pp. 138-140)。特定の述語「P」についての概念工学が成功し、「P」の意味論的特徴が変更されたとしてみよう。この場合、「P」を含む文の発話が意味論的に表現する命題は、この変更前後で異なることになる。しかし、その場合、「Pが何であるかが変化した」、「Pが変化した」という通時的変化を述べる文は、偽である命題を意味論的に表現することになってしまう。概念工学が成功裏に行われた時刻の前後で「P」が異なることを意味論的に表現するようになっただけであり、Pそのものが異なるものとなったわけではないからである。したがって、概念工学の行う操作は、言語の意味論的特徴の改変というメタレベルでの操作であり、対象レベルでの操作ではないと考えるのが自然である。通常、これらのレベルの混同は、いわゆる使用・言及の混同として誤謬であるとされる。しかし、言語行為多元主義によれば、上記の文の発話は、多くの異なる命題を表現しうるのであり、これらの文が意味論的に表現する命題はその中の一つに過ぎない。これらの文の発話が表現する命題には、これらの文の主題であるPそのものが変化したという内容をもつ命題も含まれる。文の主題であるPは、内包や外延が変化した場合でも、「P」を含む文が同一のことについて語っていると解釈される限り、持続的同一性を保つ。このため、この同一の対象であるPの対象レベルでの変化を上述の文を用いて表現することが可能だと、カペランは考えるのである。

より直観的に説明すると、カペランの考えでは、「Pが何であるかが変化した」、「Pが変化した」という文の発話は、主題であるPについて、〈Pであるための条件が何であるかが変化した〉、〈Pであるための条件が変化した〉という通時的変化を述べる命題も表現することができる。外延や内包とは異なる対象として主題が存在し、内包や外延の変化があっても、主題は同一でありうるとすることで、カペランの考える概念工学は、異なることを表現するように言語を変更するだけでなく、主題である対象そのものを変化させる試みである<sup>2</sup>。

言語行為多元主義には異論も多いにせよ、主題という存在者を導入することで、カペランの考える概念工学は、単に「「P」は何を意味するのか」というメタレベルの変更だけではなく、「Pとは何か」という対象レベルでの変更を行うものとされる点に独自性がある。カペランは、概念工学についてこのような

理論的整備を行いつつ、これまでの哲学の主要な活動は概念工学を行おうとする試みであったと論じる。この哲学(史)理解によれば、哲学の多くは、単なる言語の分析や言語の改変ではなく、現実の改変を行おうとする試みだということになる<sup>3</sup>。ただし、このように概念工学として哲学を理解した上で、カペランはその実行可能性には大きな疑念を投げかける。

概念工学が成功したと言えるのは、不適切だと評価された述語の内包をより適切に改変し、その結果として外延が変更された場合である。内包、外延を変更するためには、それらを決定する要因を何らかの形で調整するしかない。概念工学にとってメタ意味論が重要なのは、メタ意味論が語の意味論的特徴を決定する要因についての研究だからである。カペランは、「内包と外延は、話者を取り巻く外的環境によって(部分的に)決定される」とする外在主義をメタ意味論として採用する。外在主義についての議論では、意味論的特徴を決定する外的環境として、専門家の語の使用、語の使用の因果的来歴、言語共同体の語の使用パターン、物理的環境などさまざまなものが挙げられてきた。しかし、語の意味論的特徴を決定する外的環境内の要因が完全に特定されたとは到底言えない状況である。さらに、どのような外的環境内の要因をどのように調整すれば、意味論的特徴がどのように変化するのかという点については、その解明の難しさゆえに、理論化しようとする試みさえほとんど存在していない。したがって、語の意味論的特徴を決定する要因を調整することでそれを改変しようという概念工学の試みは、克服不可能(少なくとも、克服が極めて難しい)な困難さを抱え込むことになってしまうと、カペランは結論する<sup>4</sup>。さらに、「内包と外延は、話者の心的状態によって決定される」という内在主義をメタ意味論として採用したとしても、心的態度を調整するのも容易ではないため、同様の問題が生じるとカペランは論じる。

こうした理由で、意味論的特徴の改変を目指す概念工学は、ほとんど絶望的に難しい試みである。その上で、「概念工学に関わる諸プロセスは大部分が不可測であり、我々はそれをコントロールできない。しかし、我々は概念工学を試み続けるだろうし、そうすべきである」(ibid. p. 72)と、カペランは述べる。少なくとも既存の言語が不適切であるという評価を行うことは概念工学の第一歩であり、それは可能である。そして、一旦不適切だと評価されたならば、それ

を改変しようとする試みが不可能なまでに困難であろうとも、我々はその試みを続けるしかない。カペランの考える概念工学は、このようなアイロニーを備えた試みである。

### 3. 二重性格概念を表す語の意味論

前節では、概念工学が一般にどのような試みであるのかを、カペランの考えに即して説明した。本節では、「哲学」と「哲学者」の概念工学がどのような試みであるのかを考察するための最初の一步として、二重性格概念について解説する。さしあたり、本稿では「哲学」という名詞を、「SF」や「ファンタジー」のように、「哲学」を特定の文芸ジャンル名（あるいは、少なくとも文芸ジャンル名に類比的な学問ジャンル名）として理解する。

このように「哲学」を理解しても、ジャンル名の意味論をどのように構築するかには、さまざまな選択肢がありうる。特に、ジャンル名が指示するジャンルなる存在者をどのような存在者とするのかについては、見解が分かれる。「SF」のメタ意味論について検討したサイモン・J・エヴニン (Simon J. Evnine) は、ジャンルを特定の文芸伝統とする見解と抽象的な性質の集合とする見解の両者を検討している (Evnine 2015)。エヴニンは、ジャンルは文芸伝統であるという見解の方が優位であるという根拠を挙げた上で、文芸伝統とは特定の人物（話し手、受け手）、著作、場所、実践、制度、出来事などから構成される歴史的・社会的存在者であるとみなす。そして、同一の根拠により、ジャンル名がどのジャンル（どの伝統）を指示するのかは、抽象的な性質を満たすかどうかではなく、歴史的事実によって決定されるという外在主義を支持する。

ジャンルを特定の文芸伝統とする見解が抽象的な性質の集合とする見解よりも優位であるとするエヴニンの根拠は、主に2つである。第一に、前者の見解は、ジャンルの必要十分条件を特定することに関わる困難さを回避することができる。類似する性質を持つ2つの作品が全く異なるジャンルに属することがあるという分類上の問題をうまく説明することができる。なぜなら、前者の見解では、ある作品が当該ジャンルに属するかどうかは、その作品の内在的性質（またはそれを定式化した定義）ではなく、その作品に関わる歴史的事実によって

決定されるからである。第二に、前者の見解は、ジャンルが特定の価値観、規範性を持つことをうまく説明することができる。まず、ジャンルはその構成要素として特定の受け手を持つがゆえに、ジャンル内作品が成功するためには、その受け手の価値観と合致し、称賛されるような特徴を備えていなければならない。また、文芸伝統としてのジャンルは、ジャンル内作品にその伝統への恭順(loyalty)を要求する。この伝統への恭順は、ジャンル内作品の作成とその評価が特定の規範に従わなければならないという要求を生み出す(ただし、どのような規範を受け入れ、拒否するののかという点には、語り手、受け手の側にある程度の裁量も認められる)。

ジャンルを特定の文芸伝統とする見解の方が抽象的な性質の集合とする見解よりも優位であると判断するエヴニンの2つの根拠は、それなりに説得力のあるものであるが、やや不明瞭な点がある。第一の根拠は、ジャンルを記述的性質の束として定義できず、ジャンル作品と結びつけられることが多い記述的な性質の有無は、ジャンル作品であるための必要条件でも十分条件でもない述べている。他方、第二の根拠は、ジャンル作品はそのジャンルの伝統内で形成された特定の価値観と規範性に対する要求を生み出すと述べている。しかし、そうした要求に従うことは、結局のところ、特定の記述的性質を持つことになるのではないのかという疑念が生じる。もしそうであれば、第二の根拠は第一の根拠と抵触することになってしまう。二つの根拠の関係を明確化するためには、伝統内で形成される価値観と規範性を尊重することである伝統への恭順という態度がどのようなものなのかを、より明確化する必要があるだろう。さらに、記述的な性質によってジャンルの必要十分条件も与えられないことから、ジャンル名は特定の歴史的・社会的存在者という個物を直接指示するという立場をエヴニンは採用する。しかし、ジャンルに関連する語はジャンル名以外にも数多くあるため、それらの語についてどのような意味論を構築するのは不明のままである。

実のところ、エヴニンが示唆している記述的性質と価値観や規範性の尊重という二つの要素の微妙な関係性は、いわゆる二重性格概念を表す語の特徴として、よく知られたものである。二重性格概念とは、厚い概念と同様に、部分的に記述的であり、部分的に規範的な概念である。しかし、これらの要素が相互

に依存しあう厚い概念とは異なり、二重性格概念では、これらの要素は関連するが相互に独立であるとされる。この独立性については、二重性格概念について最初に詳しく論じたジョシュア・ノーブ(Joshua Knobe)たちが、「科学者である」を例に説明している。やや長くなるが引用してみよう。

物理学科のある教授が、何日も方程式を書き連ねているが、あらゆる経験的証拠に反する理論的観点に独断的に固執しているとしてみよう。この人物は科学者だと本当にみなされるだろうか。このような場合、みなされるという回答もみなされないという回答もある意味で正しいと感じるかもしれない。したがって、以下のように言うことは正しく思われる。

- (1) ある意味で、この人物は明らかに科学者であるが、科学者であるとはどのようなことか考えてみるならば、最終的には、科学者ではないと言わなければならない。

次に、厳密な実験的方法の訓練を一度も受けたことがないが、経験的な証拠によって体系的に自分の信念を改訂することで人生のあらゆる出来事に対処する人物に出会ったとしてみよう。このような場合は、先程とは逆のことを言うことが正しく思われる。

- (2) ある意味で、この人物は明らかに科学者ではないが、科学者であるとはどのようなことか考えてみるならば、最終的には、真に科学者であると言わなければならない。(Knobe et al. 2013 p. 242)

ノーブたちの解説によれば、「科学者である」という述語の適用には、関連するが相互に独立の二種類の基準がある。一つは、実験を行う、理論を定式化するなどの具体的な活動に従事するという記述的基準であり、もう一つは、これらの具体的な活動の根底にあると想定される、経験的真理に対する偏見なき探究などの抽象的な価値観を体現しているという規範的基準である<sup>5</sup>。これらの基準は独立であり、ある文脈では、記述的基準だけを満たすことである人物が「科



学者である」の外延に属すと判断されることもあれば、他の文脈では、規範的基準だけを満たすことでそう判断されることもある。このように、外延を決定するための基準として、記述的基準とそれと関連する規範的基準の二つを持ち、それぞれが異なる外延の判断に導くことがあるような述語が、二重性格概念を表す述語である。

ある語Wが二重性格概念を表すかどうかを調査するためにしばしば用いられる手法は、上の引用で示されているように、その語Wに「真に」、あるいは「真の」という修飾語を追加したときに、「Wであるが、真にWではない」、「Wであるが、真のWではない」といった文が適切に発話可能と判断されるかを調査することである。この「真に」、「真の」という修飾語は、規範的基準を顕著にすると考えられるからである。もちろん、文脈によっては、規範的基準がすでに顕著化しており、こうした修飾語なしでも規範的基準のみが適用されるということもありうる。

二重性格概念についての現在の研究では、「科学者である」、「芸術家である」、「音楽家である」、「教師である」、「兵士である」、「友人である」などの社会種語(Knobe et al. 2013)、「芸術」、「文学」などの一般ジャンル名(Knobe et al. forthcoming)が、実験哲学的手法を用いた調査により、二重性格概念を表すとされている。また、実験哲学的手法は用いていないが、サラ・ジェーン・レズリー(Sarah-Jane Leslie)は、「女性」、「哲学者」などの社会種語も二重性格概念を表すと指摘する(Leslie 2015)。

レズリーはさらに、なぜ二重性格概念を表す社会種語とそうでない社会種語が存在するのかについて考察している。彼女の考えでは、社会種は、一次的な社会的役割・機能と、その一次的な社会的役割・機能を果たすための手段である二次的な社会的役割・機能を持っている。例えば、社会種としての科学者の一次的な社会的役割・機能とは、経験的証拠に応じて理論を構築したり、否定したりする人物であるということであり、二次的な社会的役割・機能とは、経験的データを体系的に収集したり、観測器具を用いて精密な観察を行ったり、そのための訓練過程を修了しているといったことである。レズリーによれば、社会種の一次的な社会的役割・機能は、その社会種の成員がそうあるべき理想像を規定する。そして、この理想像に合致するには、一次的、二次的な社会的

役割・機能を事実として果たすだけでは不十分である。つまり、特定の社会種の成員であるための事実的条件が、理想像がもつべき条件（理想的条件）と乖離するということがありうる。このような乖離が、その社会種語の外延を決定する記述的基準と規範的基準の区別を生み出すのである。レズリーはこのように考察を進め、ある社会種の成員であるための事実的条件と理想的条件の乖離がほとんど存在しない場合、その社会種についての二重性格概念は生じないと主張する。レズリーの挙げている例では、「科学者」、「哲学者」は二重性格概念を表すが、「進化生物学者」、「徳認識論者」は、少なくとも明確に二重性格概念を表すとは言えない。進化生物学者、徳認識論者であるための事実的条件と理想的条件の乖離は、科学者、哲学者であるための事実的条件と理想的条件の乖離よりも、ずっと小さいからである（これは、ローカルな特定分野の専門家であるための事実的条件はより厳格になるため、理想的条件との乖離が生じにくいからだと思われる）<sup>6</sup>。

社会種の一次的な社会的役割・機能が、その成員の理想的条件とそれに対応する社会種語の規範的条件を規定するとレズリーは考えるが、規範的条件がどのようなものなのかを正確に述べていない。実験哲学的手法を用いた調査に基づき、グリエルモ・デル・ピナル(Guillermo Del Pinal)とケヴィン・ロイター(Kevin Reuter)は、二重性格概念の規範的条件は一次的な社会的役割・機能を果たすことにコミットしているという条件であるという見解を提示する(Del Pinal & Reuter 2018)。この見解は、なぜ二次的な社会的役割・機能だけでなく、一次的な社会的役割・機能を果たしていたとしても、規範的条件を満たさないと判断されることがあるのかをうまく説明できる。社会的役割・機能を果たしていても、十分にそれにコミットしていないと判断されることがあるからである。デル・ピナルとロイターの言うコミットするという事態は、エヴニンが「恭順」という言葉を用い、ノーブたちが「価値観を体現する」という言葉を用いて表そうとしていたことを明確化したものと考えることができる。

二重性格概念を表す語は、社会的認知、とくに差別的な認知との関連でも重要である。レズリーは、社会種語の外延を決定する記述的基準と規範的基準が差別を持続させるために用いられてきたと論じる。規範的基準が顕著化する文脈では、ある人物が社会種語の外延に属するためには、理想像が持つべき特定

の規範や価値観に従うことを受け入れる（コミットする）ことが要求される。その規範や価値観がどのようなものなのかは、慣習や伝統、社会通念に左右されるだけでなく、言語共同体内でも完全な合意が存在しないことも多い。しかし、この規範的基準は外延を決定する基準であるがために、ある人物がその基準を満たさない場合、まさにその理由で、その外延から除外されると（少なくとも発話者には）判断されることになってしまう。このため、二重性格概念を表す社会種語が一旦発話されたならば、発話者の想定する規範的基準に含まれる規範や価値観をその受け手が望ましくない、引き受けたくないと考える場合でさえも、その社会種の成員であるかぎり、それらを引き受けるように強い規範的強制力を持っていると、レズリーは指摘する（ただし、この強制力はさまざまな形で阻却可能な場合がある）。例えば、女性であるための規範的条件として、子を生み、慈しむことに対するコミットメントが要求される社会では、出産後も仕事を続ける女性に対して、「真の女性ではない」という発話が行われる。この発話は仕事を続けるかぎり女性ではなく、女性ならば仕事を続けるべきではないという強制力を持ってしまう。その結果として、仕事をせずに子を生み、育てるといふ、その社会で女性と結び付けられる記述的基準を満たす女性が多い状態が、社会の中で継続する。こうした状態の継続は、女性差別を延命させてしまう。このようなレズリーの考えと親和的な実験結果として、社会種語の適用がジェンダー・ステレオタイプに左右されることが報告されている(Del Pinal, Madva & Reuter 2017)。

#### 4. 二重性格概念を表す語としての「哲学」

「科学者」、「芸術家」などの社会種語に加え、「哲学者」も二重性格概念を表す社会種語であると指摘されていることには、すでに言及した。また、「科学」、「芸術」などの一般ジャンル名も二重性格概念を表すという研究成果を考慮すれば、「哲学」も二重性格概念を表すと考えられる。エヴニンは、文芸ジャンル名の指示を決定するような記述的性質の束は存在しないという根拠により、文芸ジャンル名は歴史的・社会的存在者であるジャンルを直接指示するというタイプの外在主義を採用した。しかし、特定のジャンル名が二重性格概

念を表すと考えれば、その指示を決定する記述的性質を特定できないことは、記述的基準ではなく、規範的基準が適用される文脈があるからだという形で説明することができる。

事実として、ある語「W」が二重性格概念を表すかどうかを検査するために用いられる、「xはある意味ではWであるが、真のWではない」というタイプの発話はしばしば「哲学」について行われる。このタイプの発話は、xが哲学と結び付けられる記述的性質を満たすが、規範的性質を満たさないと述べるものだと理解可能である。こうした言語的な検査をパスすることから、「哲学者」は二重性格概念を表すとレズリーは示唆するが、その二重性格概念の内実については詳しく論じていない。哲学者の社会的役割・機能とそれが規定する理想像は、もちろん時代によっても文化によっても異なりうる。そして、それと連動して、「哲学者」、「哲学」といった語やその関連語の外延や指示を決定するための記述的基準も規範的基準も異なりうる。また、レズリーが述べるように、こうした発話が哲学者や哲学のあるべき理想像を表すために用いられるとすれば、異なる発話者が異なる理想像を念頭に「xは哲学者である・ない」、「xは哲学である・ない」などの言明を行うこともあるだろう。本節では、特定のタイプの人々、知的実践、知的伝統についてのこうした発話の実例を哲学史の中から3種類取り上げ、その発話者がどのような規範的基準を念頭においているかを分析する。

第一に、西洋哲学の起源とされる古代ギリシアにおいて、すでに「真の哲学」についての議論が見られる。プラトンの『国家』において、グラウコンは「真の哲学者とは、どのような人だと言われるのですか」と問いかけ、それにソクラテス（の口を借りたプラトン）は、「真実を観ることを愛する人たちだ」と答える(475E)。この議論は、一部の学問や芸術のみを愛する人は、「哲学者と似ている者」にすぎず、「真の哲学者」ではないという文脈で現れる。そうした人々の活動が表面的に哲学者の活動と類似していたとしても、彼らは個別的な行為や個物のみに関心を向けているのであり、それらが共有する形相に興味を向けているわけではない。個々の行為や事物に共通する普遍的な本質を知ることがを愛し、求めるという態度を持つ人々が、ソクラテスの言う真の哲学者である<sup>7</sup>。この議論は、哲学者であるための記述的条件を述べたものとしても解釈で

きるが、本質を知ることへのコミットメントという規範的条件を述べたものとして解釈することもできる。

第二に、20世紀中頃のいわゆる分析哲学と大陸哲学の対立から、幾つか発言を集めてみたい。まず、第二次世界大戦による6年間の中断の後に再開されたアリストテレス協会の会長就任公演において、ヘンリー・H・プライス(Henry H. Price)が分析哲学(彼は「明晰化哲学」とも呼ぶ)に向けられた批判について語った発言である。この批判は、分析哲学は哲学ではないという批判であり、より詳細には、以下のように述べられる。

大戦間の明晰化哲学者は、あたかも哲学が1900年に始まったかのように書き、話すとしばしば非難された。彼らは哲学史を無視したと言われた。また、我々の先祖から我々に受け継がれた「偉大な諸問題」と我々の先祖が提示したその解決を、彼らは全く無視したと言われた。そして、その代わりに、彼ら自身の創案したトリビアルで流行のパズルに専心していると言われたのである。(Price 1945 p. 8)<sup>8</sup>

プライスは、この分析哲学批判に含まれる批判の方向性を幾つか区別した上で、それらに個々に反論すると同時に、分析哲学の実践はソクラテス以来の伝統的哲学の実践とほとんど異ならず、哲学は明晰化をその一次的な機能としてきたと論じる。その上で、プライスがもっとも真剣に向き合うのは、分析哲学が「哲学消費者の需要」に答えていないという批判である。哲学に興味をもち、それを勉強したいと望む人は、「あらゆるタイプの既知の経験的事実を体系的に位置づけうる統一的概念図式を作成」(ibid. p. 28)したいという関心を持っている。この関心は、伝統的哲学に含まれる思弁的形而上学が追求してきた関心である。この関心を持たず、それゆえ哲学消費者の需要に答えないという批判に対し、プライスはその批判を部分的に受け入れつつ、このような思弁的形而上学の関心は、分析的明晰性(analytic clarity)ではなく、総観的明晰性(synoptic clarity)という異なるタイプの明晰性の追求であり、それを追求するためにも、言語分析や言語の改訂(ある種概念工学!)が重要であると論じる。ここで注意する必要があるのは、プライスは思弁的形而上学の機能がこのような統一

的概念図式の作成であると述べるが、過去の思弁的形而上学がそれに実際に成功したとは認めておらず、作成しようとする試みであるとしていることである。したがって、この批判は、伝統的哲学がコミットしている総観の明晰性という価値観を分析哲学が共有しないという批判として理解することができる。

他方、分析哲学の側が、より伝統的な関心を引き継ぐ大陸哲学についてどのような批判を行ったのかについての証言を、ブライアン・マギー(Bryan Magee)が行っている。

[1950年台の] オックスフォードにおいては、経験主義的伝統が哲学であるという想定が常に存在した。キルケゴール、ニーチェ、ハイデガーのような哲学者によって代表される実存主義についての問いを私はある場面で一度たずねたが、彼らは哲学者ではないと私は説明されたのだった。(Magee 1997 p. 124)

1950年代のオックスフォードは、日常言語学派の最盛期でもあるが、そこではイギリス経験主義と実在論の伝統が重視され、それ以外の伝統は軽視されていた。また、日常言語学派と同時代のイギリス観念論に対しても、「真剣な注意や反対を論じること(argued dissent)にさえ値しない」と考えられていたという報告もある(Warnock 1976 p. 48)。このような合理的な批判にさえ値しないという軽蔑的評価は、単に哲学的立場の相違ではなく、プライスの言う分析的明晰性や論証の厳密さを求める態度を他の立場が持たないという、コミットメントの欠如についての評価として理解できる。事実、日常言語学派を代表するギルバート・ライル(Gilbert Ryle)が編集長だった時代の雑誌 *Mind* の編集方針を調査した研究では、その論文評価の基準は、「特定の論証的、論战的な哲学へのアプローチとそれと関連した明晰性へのコミットメント」であると分析されている(Katzav & Vaesen 2017 p. 5)。

第三に、「哲学」という訳語が日本に導入される過程でも、何が哲学についての見解の相違が存在した。西周が幾つかの訳語を試行した後に、「哲学」という訳語に落ち着いたことはよく知られている。「理学」と訳すことも検討されたが、「理学」はすでに科学の意味で用いられつつあったことと、宋代・明

代の儒学を指す語である「宋明理学」と区別する必要があるとして、「哲学」が最終的に採用された。

英フィロソフィ、仏フィロソフィー、希臘ノフィロス愛スル者、ソフィス賢ト云義ヨリ傳來シ、愛賢者ノ義ニテ其学ヲフィロソフィト云フ、周茂叔ノ所謂ル士希賢ノ意ナリ、後世ノ習用ニテ専ラ理ヲ講スル学ヲ指ス、理学理論ナト訳スルヲ直訳トスレドモ、他ニ紛ルコト多キ為メニ今哲学ト訳シ東洲ノ儒学ニ分ツ。(西 1873 p. 31)

西が西洋の哲学と東洋の儒学を区別する理由は幾つかある。主な理由として、まず、西が念頭に置く哲学は、イギリスの経験主義やフランスの実証主義であり、実証主義的要素が儒学には欠けていることである。次に、古典の注解に専念する儒学は伝統を批判的に検討することなく恭順するだけであるのに対し、哲学は先行する学説を批判しつつ進歩するという相違があることである<sup>9</sup>。

儒学と哲学の分離は現在まで日本人の哲学観、哲学教育制度に影響を及ぼしているが、これに反対する論者は、明治時代から存在した<sup>10</sup>。西周の批判者として著名なのは、桑木厳翼である。桑木は『哲学概論』(1901)において、西洋語の「フィロソフィー」には「智を愛す」の意味だけでなく、「究理探真の學」という意味もあり、両者を合わせた真義にもっとも近い語は「中国宋代の儒学者の理学」であるとしながらも、すでに科学を指す語として普及しつつあるために採用しなかったと述べる(pp. 34-35)。桑木の哲学=理学観で興味深いのは、西周たちの明治初期の西洋哲学理解を当時の西洋哲学界の実証主義的経験論の影響を受けたものであると批判すると同時に、イギリス経験主義を科学と哲学の混同として批判し、カントを中心とするドイツ哲学に定位して哲学を理解しようとする点である。

さらに、究理探真の学として哲学と理学が同じものであるだけでなく、理学のうちに西洋哲学よりも深い洞察が見いだされることもあると桑木は判断する。

而して其概念を論するの前、概念の代表する事物を認識する所以の理を説けるは即ち荀子の語を以て之を表はせば名の前に知を説けるは、現今の所

謂認識論的論理学と軌を同うし、アリストテレースの論理学よりは一層根本の問題に入れるものと見るを得べき也。(桑木 1901 p. 451)

桑木の哲学観は、桑木の著作を中国語に翻訳した王国維に影響を与え、王の哲学観は、中国において現在まで広く受け入れられるものとなった。清政府では、哲学が悪影響を与えることを懸念して学校制度に哲学を導入しない方針が提案されていた。この方針に反対し、王は「哲学弁惑」(1903)を発表する。楊(2014)によれば、この論文において、王は桑木に影響を受けつつ、中国には存在しなかった「哲学」という語を日本から輸入し、同時に桑木の置いた「中国の宋代」という限定を取り払い、哲学と理学一般との類似性を強調した。その上で、王は「中国哲学」という語を導入し、中国哲学の発展のためにも、哲学教育の重要性を主張したという<sup>11</sup>。桑木は「智を愛す」という側面よりも「究理探真」という側面を重視したが、王はこの方向性に従い、「哲学を志す人」と「浅い革命家」を対比させた。楊の解説によれば、自分の政治的な野心の実現に有利な説を採用するのが浅い革命家であり、哲学者はさまざまな説を検討した上で何が真理かを決定する人である。

西、桑木、王の哲学観の相違は、「哲学」の記述的基準についての相違としても理解できるが、実証主義と批判精神、理性的認識、対立する諸説への公正な評価といった価値観や規範へのコミットメントのどれが「哲学」の規範的基準なのかという点についての相違であると理解することもできる。

## 5. 「哲学」の概念工学

哲学とは何かという点について対立と、その結果としての特定のタイプの人々や知的実践、知的伝統を哲学から除外しようとする言動は、4節で紹介した以外の多くの場面でも見ることができる。現在の哲学界では、従来の哲学観が男性中心主義、西洋中心主義に陥っており、それ以外の人々や哲学的伝統を差別的に排除してきたという歴史への反省から、従来の狭隘な哲学観についての見直しが国際的に進行している。この見直しは、極めて多くの方向から、さまざまな実践を通じて試みられているため、その全貌をここで記すことは難しい<sup>12</sup>。



簡単に記述しておくとして、第一に、哲学への貢献を行った非男性の哲学者を差別的な偏見なしに評価しようという多くの試みがある。第二に、西洋以外の哲学的伝統を西洋哲学の伝統と等しく位置づけるという試みだけでなく、言語的にも文化的にも異なる非西洋系の哲学者の思想や実践を理解し、評価しようとする試みも存在する。これら2つの試みは、単に非男性、非西洋の哲学、哲学者を積極的に紹介し、その意義について論じるだけでなく、そうした人々の生活や経験から生じる主題に取り組むことを哲学の活動として位置づけるという試みも含んでいる。さらに、これらの試みは、哲学の授業でもこれらの哲学、哲学者を扱ったり、教員組織の人種的、ジェンダー的多様性を促進したりするという社会的・制度的な運動としても進行している<sup>13</sup>。第三に、これらの試みと連動して、主流の哲学で主に用いられてきた方法とは異なる知的探求の方法も哲学の方法とすることで、哲学の方法論的拡大を行おうとする試みもある<sup>14</sup>。

これら3つの試みは、文化的、人種的、ジェンダー的、方法論的な偏向を正し、従来理解されてきた哲学、そして哲学的伝統をより多様性と包摂性のある形で再整理しようという試みであると言ってよい。同時に、これらの試みは「哲学」についての概念工学とみなしうる。まず、従来理解されてきた哲学は、文化的、人種的、ジェンダー的、方法論的偏見故に、特定の知的伝統や主題、方法を体系的に「哲学」とその関連語の外延から除外するという方向性を持っていた。この方向性の帰結は、単に記述的なレベルで、こうした知的伝統や主題、方法には哲学という知的身分が通常与えられないというだけではない。規範的なレベルでは、そうした身分が与えられるためには、これらの伝統、主題、方法が、従来支配的だった哲学の伝統、主題、方法が従ってきた価値観や規範性にコミットすることを立証する必要があるという举证責任の不均衡である。この举证責任の不均衡は、それが単なる偏見に由来するものであるならば、認識的不正義の一形態とみなしうる。したがって、「哲学」とその関連語の概念工学は、この認識的不正義という社会的・道徳的に問題のある帰結を不適切であると評価し、それを是正しようという試みである<sup>15</sup>。

概念工学についてのカペランの整理が正しいとすれば、概念工学の試みは絶望的なまでに難しい。しかし、「哲学」の概念工学は、2つの単純な理由により、実行可能性が高いと考えられる。第一の理由は、「哲学」の概念工学が、

哲学に属する人物、著作、実践、方法、制度などを改変しようとする、学問ジャンルとしての哲学をとりまく社会制度自体の改変の試みであることである。こうした社会的・制度的な改変が、「哲学」とその関連語の意味論的特徴に比較的強い影響力を持つことは、内在主義、外在主義のどちらをメタ意味論として採用しようが、ほぼ確実だと考えられる。

関連する第二の理由は、哲学（史）の多様化・包摂性促進の試みが、哲学のエキスパートが進める運動であり、それは大規模なものになりつつあるということである。外在主義をメタ意味論として採用するならば、内包や外延の決定要因には、エキスパートの言語使用が含まれる。学問ジャンルとしての「哲学」とその関連語についてのエキスパートは、特定の社会制度の中で哲学者という社会的機能・身分を果たす人々である。そして、この哲学者たちは同時に、上述した多様性・包摂性を促進する試みの担い手を含んでいる。そのため、この試みを行う哲学者たちの言語使用により、「哲学」とその関連語の内包と外延が変化するはずである。さらに、これらの哲学者たちは、大学や学会という制度において、この試みを直接行っていない哲学者とも交流を行いやすい立場にいるため、他のエキスパートの言語使用にも影響を与えることができる。そして何より、哲学者は教育や著作を通じて、「哲学」とその関連語についての非哲学者の言語使用にも他の人々よりも強い影響を与えることができる。これらの点は、学問ジャンル名としての「哲学」が他の語と異なる点である。哲学者の用いる語が専門用語ではなく、非哲学者も日常的に用いる語である場合、その語の内包や外延を哲学者の言語使用によって容易に変更することはできない。しかし、学問ジャンル名としての「哲学」とその関連語については、哲学者は比較的強い影響を与えることができる立場にいる。この影響は、言語使用だけでなく、他の人々が哲学について持つ考えにも及ぶはずである。したがって、メタ意味論として内在主義を採用したとしても、類似した理由で、哲学者が「哲学」とその関連語の内包と外延を変化させるのに比較的強い影響力を持っていると言うことができる。

3、4節で説明したように、「哲学」とその関連語は、相互に独立の記述的要素と規範的要素を持つ二重性格概念を表す。そして、哲学の多様化・包摂性促進の試みは、哲学とは何であるのかだけでなく、哲学は何にコミットするの

かという点も変更する確率が高い。つまり、「哲学」とその関連語についての概念工学は、その記述的基準と規範的基準に対応する二つの内包と、それらの内包によって決定される二つの外延を、両方とも変更する試みである確率が高い。この試みは現在進行中であり、その結果、「哲学」とその関連語の二つの内包と外延がどのようなものになるかは、具体的に予測することが困難である。それは非西洋系の哲学伝統、脱植民地哲学、フェミニスト哲学など、これまで正統派とされてきたもの以外の哲学の方法と主題を含み、さらにそれらの哲学が持つ特定の規範や価値観へのコミットメントも含むものになるはずである。おそらく、具体的な語彙でそうした哲学全体の内包を記述しようとすれば選言を用いるほかになく、そうしないならば、極めて抽象的な記述しか与えられないようなものになるだろう。

この点についてもう少し具体的に述べるために、クリスティー・ドットソン(Kristie Dotson)が提案した、哲学とはなにかを規定する基準を考案し、適用する際に従うべき規範を紹介しておく(Dotson 2012, 2013)。ドットソンは、「自分たちの生に関連する問題と環境に価値を置くこと」を哲学とは何かという基準を考案する際の規範とし、「複数の古典(canons)と学術的妥当性についての複数の理解の仕方を承認し、奨励すること」をその基準を適用する際の規範とするように提案する(Dotson 2012 pp. 17-18, 2013 pp. 12-13)。異なる人々は、異なる問題や環境を自分の生に関連するとみなしている場合、哲学とは何かという基準は、それらすべてを尊重しなければならない。そして、その基準を適用して、特定の著作や人々の実践を哲学に属するかどうかを判定する際には、その読者や実践者が求める知的権威や探求方法を尊重しなければならない。このような規範に従って作られる哲学とは何かについての基準は、そのどれも普遍性を持つものではないとドットソンは考える。しかし、ドットソンによれば、これらの複数の哲学についての基準の不調和は、新しい探求や方法とともに、実践者の関心を追求しやすい制度を生み出すという積極的な機能を持っている。

ドットソンの提案する規範にしたがって哲学とは何かを整理する場合、哲学の記述的要素についても規範的要素についても、選言的にしか記述できないものとなるはずである。これは、哲学が統一的な共通要素を持たないことを意味する<sup>16</sup>。しかし、「哲学」とその関連語の概念工学は、哲学内に新しい探求主

題，探求方法，探求のための制度を生み出すという積極的な意義を持つ。これは、「哲学」とその関連語の概念工学の認識的意義である。この概念工学は、哲学に関する認識的不正義の解消という社会的・道徳的意義に加え、こうした認識的意義も持つ試みである。

このように「哲学」とその関連語についての概念工学を理解する場合，その外延は従来よりも拡大すると思われるかもしれない。しかし、「哲学」とその関連語についての概念工学は，必ずしもそうした帰結を持つものではなく，少なくとも部分的に外延の縮小をとまう可能性もある。例えば，フェミニスト哲学において，理性や客観性といった哲学史において中心的な重要性を持ってきた主題は，男性中心的なものとしてのみ規定されてきたという指摘がある(Bordo 1987; Lloyd 1993a, 1993b)。同様に，西洋諸国による植民地支配を経験したアフリカやラテン・アメリカの哲学者は，西洋哲学における理性，合理性，良心，自由，人間性といった主題が，西洋という地域の文化や制度に限定されたものであるだけでなく，植民地支配による自分たちの非人間化を招いたことを批判する(Césaire 2000; Dussel 1995; Gordon 2006; Mignolo 2011)。

非フェミニスト哲学，西洋哲学に対するこのような批判は誤りであると応答することは可能である。しかし，これらの批判が正しいとする場合には，その応答として3種類の選択肢がある。(a)批判されている主題についての伝統的西洋哲学を拒否する，(b)これらの主題を，フェミニスト的観点，脱植民地化という観点から再解釈・再整理する，(c)これらの主題についての哲学として，伝統的西洋哲学とそれ以外の哲学を並列する，という3つの可能性である<sup>17</sup>。(a)の選択肢は明確に，従来哲学とされてきたものが部分的に哲学ではもはやなくなるという帰結を持つ。(b)の選択肢も，再解釈・再整理がどのようなものになるかに応じて，こうした帰結を持つ可能性がある。これらの選択肢のどれが適切なのかは，批判ごとに考察されるべき問題であるにせよ，「哲学」とその関連語の概念工学は，その外延が少なくとも部分的に収縮するという可能性を持つ試みなのである<sup>18</sup>。

本稿では，「哲学」とその関連語についての概念工学がどのような試みであるかを説明してきた。本稿で説明したのは，そうした概念工学がとりうる一つの形態に過ぎない。「哲学」という語に本稿が指摘したもの以外の問題がある

と評価される場合には、別の形態の概念工学が試みられることは十分に考えられる。また、本稿が記述した概念工学にしても、それを現実的に遂行するためには、さまざまな理論的、制度的、経済的、社会的、精神的な困難が生じる<sup>19</sup>。こうした困難が、認識的不正義の解消という社会的・道徳的意義と新しい探求主題、方法やそのための制度の形成という認識的意義を上回る問題を引き起こすならば、概念工学の試みも再考されることもありうる。しかし、哲学の多様化・包摂性促進の試みは、すでに行われているだけでなく、徐々に拡大しつつある。そして、本節で述べた理由により、より多くの哲学者がこの試みに賛同し、参加することで、その実行可能性はさらに高まるのである。

## 註

1. 「概念工学」とほとんど同じ意味で、しかし微妙な相違をもって用いられる語に、「概念倫理学」がある。両者の微妙な相違については、Plunkett & Cappelen (2020)を参照のこと。本稿では、「概念工学」という語を採用するが、本稿の内容自体はこの用語選択に特に依存していない。ただし、誤解のないように追記しておくが、これらの語は（ミスリーディングでさえある）単なるラベルであり、「概念に関わるのではなく、実のところ工学も行われていない」(Cappelen 2018 p. 4)と、カペランは概念工学について注記している。
2. 概念工学は単に言語の改変ではなく現実の改変でもあるとするカペランの議論は、言語が（少なくとも部分的に）構成する社会的現実以外のものが主題である場合にも適用できるのかは疑わしい（この点についての疑念を、Ball (2020)が表明している）。
3. 哲学以外で概念工学に取り組む分野として、カペランは法学と精神医学を挙げている。
4. この困難さの理由が、メタ意味論の理論的未発達に由来するのか、使用のパターンから意味論の特徴を確定的に決定するような規則は存在しないという原理的な不可能性に由来するのか、カペランの説明は明確ではない点がある。
5. ここでの解説では、ノープたちが「概念」と書いている箇所を「述語」に変更している。二重性格概念についてのより詳しい解説は、Reuter (2018)を参照のこと。
6. 社会種語の外延を決定する事実的条件と理想的条件の乖離が大きくなればなるほど、ある語は明確に二重性格概念を表すと言えることができる。このように、ある語が二重性格概念を表すかどうかは、程度問題となりうる。実験哲学的手法を用いた研究でも、「真の」、「真に」という修飾語の適用可能性についての判断は語ごとに異なるため、その判断の割合によってどの程度その語が二重性格概念を表すのかが測定される。
7. 古代ギリシアにおいて「φιλόσοφος」という語は知を愛することを意味し、それが「哲学」の語源であるとしばしば説明される。ソクラテス以前のこの語の使用について調査し、こうした標準の説明が誤りであると述べる研究もある(Moore 2019)。ま

- た、古代ギリシアに哲学の起源を置く哲学史観は18世紀末にドイツで流行し、その後現在まで主流となったが、それ以前はエジプトやペルシア、インドに哲学の起源を置く歴史的観の方が主流であったとする研究もある(Park 2013).
8. 分析哲学に対するこの種の批判はすでに1930年代に存在しており、それへの応答も行われている(Stebbing 1934).
  9. 西周の儒学に対する態度は、時期によって異なっている。この点についての詳しい研究として、林(2013)がある。
  10. Sela (2018 p. 73)によれば、1888年に刊行された内田周平の『支那哲学史』、井上岡の『哲学要領』において、すでに「支那哲学」という語が用いられている。
  11. 桑木巖翼の『哲学概論』は、「哲学の概念を分析し、其性質を究明して、最妥当たる定義に到達」(桑木 1901 p. 48)しようとする試みを含んでいる。王国維はこの試みに影響され、「哲学」の正しい定義(名)を提示する試みとして「哲学弁惑」を著した、と楊(2014)は論じる。この点で、彼らの試みは、「哲学」の概念工学の試みとみなしうる。ただし、両者はこの試みを通じて、イギリス経験主義や政治哲学を哲学から除外しようとしている。
  12. 哲学の多様性・包摂性促進のための試みに関連する研究や資料は膨大なものになる。網羅的なものではなく、やや古い情報が多いという問題もあるが、アメリカ哲学学会がそれらの情報を収集し、公開している(“Resources on Diversity and Inclusiveness” ([https://www.apaonline.org/page/diversity\\_resources](https://www.apaonline.org/page/diversity_resources))).
  13. また、これまでの哲学の男性中心主義、ヨーロッパ中心主義だけでなく、健常者中心主義(abilism)を解消しようとする試みもある。さらに、制度的改革として、雇用における有名大学偏重(prestige bias)を解消しようとする試みもある。
  14. こうした哲学の多様化・包摂性促進の試みには通常含められないが、実験哲学の活発化を受けて、非経験的方法と結び付けられることで自然科学や社会科学と区別されてきた哲学を、経験的方法も含めるように再整理しようとする試みもある。この試みは、歴史上の哲学者が経験的方法を排除していなかったことを示し、哲学の伝統を方法の観点から理解し直すという試みを含んでいる(Sytsma 2017; Sytsma & Livengood 2016, ch.1).
  15. 一部の哲学的伝統のみが特定の積極的な認識的身分を与えられ、他の哲学的伝統が不当にその認識的身分を剥奪されることが、哲学に関する認識的不正義である。この認識的不正義はさまざまな形態をとりうる。非西洋哲学に関わる認識的不正義の問題については、Alcoff (2017)にまとめられている。また、挙証責任の不均衡については、Dotson (2012)が論じている。
  16. 西洋哲学内ですら、「哲学」の一般的定義を与える困難は、すでによく知られたものである(例えば、Godlovitch (2000)を参照のこと)。この困難の部分的理由は、哲学がどのようなものなのかは、歴史的にも変遷しているからである。
  17. この3つの選択肢は、Witt (1993 pp. 307–308)が提示した、フェミニスト哲学による哲学の男性中心主義批判に対する応答の選択肢を、やや改変したものである。また、ヨーロッパ中心主義に対する批判が正しい場合の哲学がどのように変化するかを、Maldonado-Torres (2006)が論じている。
  18. もちろん、何らかの主題についての見解に差別的偏見やバイアスが入り込んでいることは、これまで正統とされてきた哲学だけの問題ではない。他の哲学にも同様の批判は向けられる。
  19. 明治期以降、西洋哲学を正統派として受容してきたにもかかわらず、地域的、文化

的、言語的には西洋とは異なり、また植民地主義にもコミットした日本という国に対しては、特に独自の問題が生じると考えられる。しかし、この点について十分に考察することは、本稿の範囲内では行うことができない。

### 参考文献

- Alcoff, L. M. (2017). “Philosophy and Philosophical Practice: Eurocentrism as an Epistemology of Ignorance”, in: *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice*, I. A. Kidd, J. Medina, & G. Pohlhaus, Jr. (eds.), Routledge, pp. 397–408.
- Ball, D. (2020). “Fixing Language: An Essay on Conceptual Engineering”, by Herman Cappelen”, *Mind*, 129 (513), pp. 245–256.
- Bordo, S. R. (1987). *The Flight to Objectivity: Essays on Cartesianism and Culture*, State University of New York Press.
- Cappelen, H. (2018). *Fixing Language: An Essay on Conceptual Engineering*, Oxford University Press.
- Césaire, A. (2000). *Discourse on Colonialism*, Trans. by J. Pinkham, Monthly Review Press.
- Del Pinal, G., Madva, A., & Reuter, K. (2017). “Stereotypes, Conceptual Centrality and Gender Bias: An Empirical Investigation”, *Ratio*, 30 (4), pp. 384–410.
- Dotson, K. (2012). “How Is This Paper Philosophy?”, *Comparative Philosophy*, 3 (1), pp. 3–29.
- (2013) . “Well, Yes and No: A Reply to Priest”, *Comparative Philosophy*, 3 (2), pp. 10–15.
- Dussel, E. (1995). *The Invention of the Americas: Eclipse of ‘the Other’ and the Myth of Modernity*, Trans. by M. D. Barber, Continuum.
- Evnine, S. J. (2015). ““But Is It Science Fiction?”: Science Fiction and a Theory of Genre”, *Midwest Studies in Philosophy*, 39 (1), pp. 1–28.
- Godlovitch, S. (2000). “What Philosophy Might Be About: Some Socio-Philosophical Speculations”, *Inquiry*, 43 (1), pp. 3–19.
- Gordon, L. (2006). *Disciplinary Decadence and the Decolonization of Knowledge: Living Thought in Trying Times*, Taylor & Francis.

- Katzav, J. K. & Vaesen, K. (2017). “Pluralism and Peer Review in Philosophy”, *Philosophers' Imprint*, 17 (19), pp. 1-20.
- Knobe, J., Prasada, S., & Newman, G. (2013). “Dual Character Concepts and the Normative Dimension of Conceptual Representation”, *Cognition*, 127, pp. 242–257.
- Leslie, S.- J. (2015). “Hillary Clinton is the Only Man in the Obama Administration”: Dual Character Concepts, Generics, and Gender”, *Analytic Philosophy*, 56 (2), pp. 111–141.
- Liao, S.- y., Meskin, A., & Knobe, J. (forthcoming). “Dual Character Art Concepts”, *Pacific Philosophical Quarterly*.
- Lloyd, G. (1993a). “Maleness, Metaphor, and the ‘Crisis’ of Reason”, in: *Mind of One's Own: Feminist Essays on Reason and Objectivity*, Second Edition, L. M. Antony and C. E. Witt (eds.), Taylor & Francis, 2001, pp. 73–89.
- Lloyd, G. (1993b). *The Man of Reason: “Male” and “Female” in Western Philosophy*, The University of Minnesota Press.
- Mignolo, W. D. (2011). *The Darker Side of Western Modernity: Global Futures, Decolonial Options*, Duke University Press.
- Price, H. H. (1945). “Clarity Is Not Enough”, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supplementary Volumes 19, pp. 1–31.
- Plunkett, D. & Cappelen, H. (2020). “A Guided Tour of Conceptual Engineering and Conceptual Ethics”, in: *Conceptual Engineering and Conceptual Ethics*, A. Burgess, D. Plunkett, & H. Cappelen (eds.), Oxford University Press, pp. 1–26.
- Reuter, K. (2019). “Dual Character Concepts”, *Philosophy Compass*, 14 (1): e12557.
- Reuter, K., & Del Pinal, G. (2017). “Concepts in Social Cognition: Gender and the Normative Dimension of Conceptual Representation”, *Cognitive Science*, 41 (S3), pp. 477–501.
- Stebbing, L. S. (1934). “Analysis and Philosophy”, *The Philosopher*, 12, pp. 149–155.
- Sytsma, J. (2017). “Two Origin Stories for Experimental Philosophy”, *teorema*, 36 (3), pp. 23–43.
- Sytsma, J. & Livengood, J. (2016). *The Theory and Practice of Experimental*



*Philosophy*. Broadview Press.

Magee, B. (1997). *A Concession of a Philosopher: A Journey through Western Philosophy*. Random House.

Maldonado-Torres, N. (2006). "Post-continental Philosophy: Its Definition, Contours, and Fundamental Sources." *Worlds and Knowledges Otherwise*, 1 (3), pp. 1–29.

Moore, C. (2019). *Calling Philosophers Names: On the Origin of a Discipline*, Princeton University Press.

Park, P. K. (2013). *Africa, Asia, and the History of Philosophy: Racism and the Formation of the Philosophical Canon, 1780–1820*, State University of New York Press.

Sela, O. (2018) "A Preliminary Overview of the Genealogy of zhaxue in China, 1888–1930", in: *Concepts of Philosophy in Asia and the Islamic world, Vol. 1: China and Japan*, R. C. Steineck, R. Weber, R. Gassmann, & E. Lange (eds.), Brill, pp. 69–89.

Warnock, G. J. (1976). "Gilbert Ryle's Editorship", *Mind*, 85 (337), pp. 47–56.

Witt, C. E. (1993). "Feminist Metaphysics," in: *Mind of One's Own: Feminist Essays on Reason and Objectivity*, Second Edition, L. M. Antony and C. E. Witt (eds.), Taylor & Francis, 2001, pp. 302–318.

桑木巖翼. (1901). 『哲學概論』, 早稻田大學出版部.

西周. (1873). 「生性発蘊」, 大久保利謙 (編) 『西周全集』, 第1巻, 宗高書房, pp. 29–129.

林美茂. (2013) 「哲学か、それとも理学か—西周の Philosophy 概念の翻訳問題をめぐって—」, 『アジア文化研究』, 39号, ICU 研究所, pp. 223–236.

プラトン. 『国家—正義について—』, in: 藤沢令夫 (訳) 『プラトン全集』, 第11巻, 岩波書店, pp. 17–773.

楊冰. (2014). 「王国維の哲学思想の出発点「正名説」における桑木巖翼の『哲学概論』(1900)の影響: 王国維の『哲学弁惑』(1903)を中心に」, 『人文学論集』, 31, 大阪府立大学人文学会, pp. 1–11.